

横光利一『旅愁』論

——「日本」という表象——

金 季 村

一、『旅愁』のテキスト空間

横光利一『旅愁』の評価は、時代的コンテキストとの対照がこれまで重要な課題になってきた。昭和一一年初春から昭和一二年初秋までの時期にいたる内容が、昭和一二年から二二年まで、日中戦争と太平洋戦争をはさみ、敗戦後まで約一〇年間にわたって断続的に書かれているからである。このために、執筆時期と描かれている内容とが直線的に結びつけられ、従来、「日本」という概念を絶対化している悪しきテキストとされてもきたのだが、実際の構造は、むしろその反対の側面にも向かっているのではないか。この問題をテキストに於ける（空間の移動）という側面から考えてみたいと思う。

『旅愁』の構成を簡単に見ると、「第一篇」と「第二篇」は、昭和一一年春（ブルム政権の誕生、「パリの復活祭が近づいた春寒い風が河岸から吹く」という一節）からパリ祭が終る夏まで、フランスを中心としたヨーロッパを舞台に展開している。「第三篇」以降は、矢代が七月末にパリを発つてベルリンに滞在し、シベリアを経由して帰国する昭和一一年八月（ベルリンのオリンピック競技がまだ四日残つてゐる」という一節）から始まって、昭和一二年夏（蘆溝橋事件の話題）まで、日本の各地、主に、東北、京都、九州などを廻る話である。『旅愁』の評価に関しては、これまで、その構成上の不均衡がしばしば指摘されてきた。「第一篇」と「第二篇」に關しては比較的评价が高い反面、「第三篇」以降は思想的に偏向しているという批判が多いようである。たとえば、「第

「一篇」と「第二篇」が単行本化され、いまだ「第三篇」の連載が開始されていない段階で、吉田健一は、「西欧に就ての実感」を克明に描写していると評価してもいるのだが、「文芸雑誌」に「第三篇」が連載される昭和一七年頃からは、こうした評価は一変していくことになる。岩上順一が、「主人公の分裂した意識を、作家の意識や観点から区別するものが見出されない」と批判しているのもその一例といえよう。のちになると保昌正夫のように、「晩年の横光の心境、思想、あるいはそれに基づいての操作が瞭然と作中に現われてくるのは「旅愁」後半においてである」と、後半に重点を置く読みも出てくるようになるのだが、いずれにせよ、テクストの構成が偏っているという指摘においては共通するのである。

東郷克美は、「第二篇」の雑誌連載最終回に「(終篇)」とあることや、「第三篇」の連載開始まで一年半以上の空白があり、その間に日米開戦があることを考え合わせると、帰国後の矢代を中心とした「第三篇」以降の物語が最初から横光の構想の中にあつたかどうか疑わしいとし、「第三篇」を境に久慈を排除するなど、作者は思想的平衡感覚を失い、作品は偏向への歯止めがきかなくなつていったとして⁴⁾いる。東郷の論は成立論的な観点から興味深い事実を示している

が、本稿においてはこれともまた異なる観点から、テクスト空間の構造を自律的に捉え直してみたいと思う。国外と国内がその移動をも含めて同時に描かれていることの意味を、テクストの〈形式〉から考え直してみたいというのがその主意である。

二、〈旅〉にかかわる語り手の操作

「旅愁」において、作中人物たちのフランスの旅は、物語の冒頭から既に始まつていた。矢代や久慈らの一行がパリで暮らし始めて間もない時点で、セーヌ河の岸辺で久慈が矢代を待ちながら眺める風景の描写から小説は書き起こされており、これに対し、パリへ到着するまでの南周りの旅は、回想の形で後に語られることになるのである。

家を取り壊した庭の中に、白い花をつけた杏の樹がただ一本立つてゐる。復活祭の近づいた春寒い風が河岸から吹く度びに枝が慄へつつ弁を落していく。パツシイからセイヌ河を登つて来た蒸気船が、芽を吹き立てたプラタンの幹の間から物憂げな汽缶の音を響かせて来る。城砦のやうな厚い石の欄壁に肘をついて、さきから、河の水面を見降ろしてゐた久慈は石の冷たさに手首に鳥肌が立つて来た。(『定本横光利一全集 第

八卷」三頁、以下テキストからの引用は頁数だけを記す⁽⁵⁾

さう云へば矢代はエヂプトのカイロのことを思ひ出す。あのピラミッドの真暗な穴の中を優しく千鶴子を助けて登つた久慈の姿を思ひ出す。(七頁)

以後、このように船旅から始まる物語内容は時間の経過に沿つて順次、さかのぼるように語られていくことになるのである。こうした構成に関して、天沢退二郎はたとえ次のように説明している。

抒情的な、メロディアスな語りの紐で手繰り戻されるようにして、南回りの船旅の日々の喚起に移つていくのは、二つの旅、すなわち矢代たちの《洋行》全体とこの船旅との関係に至当した構成であるといえよう。船旅は《洋行》のはじまりであるが、はじまり以前の歴史でもあり、しかもむしろ、その記憶は《洋行》全体の内へと転げ込んで、あたかもその全体の核心であるかのように、あるいは核心の先取りであつたかのよう⁽⁶⁾に、図々しい変質と転生をとげてしまふからである。

全体の旅と、それに包摂される船旅の構成に注目した天沢の指摘は示唆に富んでいる。矢代にとって、千鶴子と出逢つた船旅が重要な位置を占めていることは疑えない。が、実は彼にとっての船旅は、さらにもう一つの重要な意味を

担つていたのではないか。マルセイユへ上陸する前の矢代の心境からその意味を汲んでみることにしよう。

彼(矢代―引用者注)は今の自分を考えると、何となく、戦場に出て行く兵士の気持ちに似てゐるやうに思つた。長い間、日本がさまざまなことを学んだヨーロッパである。そして同時に日本がそのため絶えず屈辱を忍ばせられたヨーロッパであつた。

地中海へ這入つて以来、憧れの底から無性に襲ふこのやうないら立たしさは、船が進めば進むほど矢代の胸中に起つて来たのも、やはり来て見なければ分らぬことの一つだと矢代には思はれた。(一一頁)

矢代は船から降りてヨーロッパへ足を踏み入れることを「敵陣へ乗り込む」ように感じ、「日本の国土といつてはこの船だけである」と思う。結局、矢代は足を硬直させ、船で千鶴子と話をしながら一日を過す。この時、矢代は早くも千鶴子に結婚願望を抱くことになるのだが、しかし、それは恋愛心理と関係のない、ただ、千鶴子がパリにおける「日本の婦人」だからなのであつた。つまり、矢代にとって船旅はまだヨーロッパの地を踏んでいない、ヨーロッパ旅行の前段階なのであり、パリを見学する中で「まだ西洋を見なかつたころの印度洋や紅海あたりの船旅」を思い出す

ことは、既に始まっている眼前のヨーロッパ旅行に対して感ずる矢代の抵抗の表現として見ることも出来る。こうした構成は、そうした矢代の心理をくつきりと浮かび上がらせようとする語り手の操作なのであり、仮に船旅から始めて、その後パリを廻るという構成をとったとしたならば得ることのできない効果であるともいえよう。

帰国の旅が始まる「第三篇」以降においても、実はこのような記述がなされている。「第三篇」の冒頭の部分を引いてみることにしよう。

もう三四時間で国境の満洲里へ着くといふころ、少し矢代は眠くなつた。いつでも汽車から降りられる仕度を整へ上衣を脱いだだけの姿で、また彼は寝台へ昇つた。(四五二頁)

しかし、さういへば、これで矢代も今はしどろもどろの態だつた。もう今は考へる余力などなくなり、見て来たものだけの重さを持ち応へてゐるだけがやつとのことだつた。パリを發つたのが七月の終りで、それからベルリンへ行つた一ヶ月の間に、またいろいろの事情でイタリヤまで飛行機で飛んだりした。その間、アメリカを廻つてゐる千鶴子から手紙が三度ばかり来たが、矢代の方から宿の定まらぬ千鶴子に手紙の出し

やうがなかつた。ベルリンでは沢山な日本人と彼は新しく知り合になつた。そのうちにはマルセーユまで同船で来た者らと巡り合つたりしたことなど、一度ならずあつた。(四五五頁)

矢代がパリを發ち、シベリアを経由して帰国する過程の描写においても、その中間の経緯は一切描かれておらず、すでに走行中の列車に乗っている場面から語られていることがわかる。千鶴子や久慈、東野、真紀子など、パリで行動と一緒にした人々との関係がどうなつたのか、パリを始めヨーロッパ全体の旅行がどうだったのかなど、まだ、ヨーロッパでの旅行が終わりを告げていないうちに、既に帰国の旅が始まっているわけである。こうした語りの操作を象徴的に示しているのが、「さういへば」という語の使われ方で、この語をはさみ、その前後の記述には矢代の相反する気分が取り込まれている。右の引用で、「さういへば」の語に導かれてつづられる、「見て来たものだけの重さを持ち応へてゐるだけがあつた」という記述からも推察できるのだが、祖国へ向かう列車の中で広大なシベリアを通過する感慨に、それ以前のヨーロッパでの気重な述懐が差し挟まれているのである。他にもたとえは、帰国してから矢代がパリで千鶴子と一緒にサン・トーマ寺院へ行

ったことを思い出す場面においても、「さう云へば」の語が用いられていた(六〇〇頁)。カソリックと科学の接点を探していた矢代は、これに成功したギリシヤの聖トマスという人物を調べ上げ、それにならって、西洋に代るべき東洋の美質を再建するときであると喜ぶのだが、その後すぐに、サン・トーマ寺院の十字架の多い壁画を見たときの不快感を思い出し、ギリシヤの滅亡の原因は、(和(零))のない知性にあると考えている。そして、結局、ギリシヤの幾何学に日本の幣帛を見立て、一切の対立を認めない古神道に向かうことになるのである。このように、矢代の感じるヨーロッパでの旅の憂いは、現地にいたときより、むしろ帰国してからフィード・バックして記述されることが多い。つまり、帰国する過程、あるいは、帰国後に感じる矢代の内面には、つねにヨーロッパでの記憶が照らし合わせられ、矢代はその中で格闘しながら「日本的」な原理を探していくのである。こうした矢代の感情のせめぎあいを表すときに、語り手は「さういへば」という語を用いて、語りの時間を操作しているのである。

以上のように、『旅愁』のもっとも特徴的な点は、登場人物たちの空間の移動にあると思われる。ヨーロッパの空間、ヨーロッパ―日本間の移動中の空間、日本の空間がそれぞれ

れ並列的に描かれ、小説の設定の中心となっている。登場人物たちが空間を移動していく過程、あるいは、移動が完了した時点から物語が提示され、その前段階の過程は、回想の形で後に語られていく。つまり、空間を移動していく過程が、語り手の操作によって切り取られ、編集されているのである。

ところが、語り手によって操作されているテキスト空間は、語り手の統御から脱して、語り手の外から、逆に語り手の言説に働きかけている点があることに注意したい。それは、〈空間の移動〉というものが、単に小説の舞台が変わるという問題に止まるのではなく、小説の〈形式〉としても機能しているからである。

三、〈空間の移動〉という機制

〈空間の移動〉によっていったい何が変わるのか。テキストのなかで、登場人物たちはその変化についてしきりに議論している。パリの伝統を代表するノートルダム寺院へ行く途中、東野と久慈は日本の伝統について議論するのだが、西洋から入ってきたものと日本固有の伝統的なものと「最大公約数」を大切にしなければならぬ、と力説する久慈に向かって、東野は「しかし、最大公約数の単位は

一だ。一の質がどこだつて違つたらどうする。」(三〇一頁)と反論している。「一の質」が〈場〉によつて違つてくるといふ認識は、実は矢代にも共有されており、久慈に、「君、日本へ帰れば、もう君と千鶴子さんとは会はないにちがひないよ。だから今のうちさ。」と勧められたことを思い出した矢代は、次のように考えるのである。

たしかに、千鶴子と自分との交遊は事実あつたことだつたが、それも夢と等しいものだつたと、思へば思ひ得られる自分の国の変化だつた。またそれは同時に自分自身の変化でもあるのだつた。何がこのやうに交遊しめたのか分らなかつたが、パリにゐたときの同じ思ひを貫きつづけてゐても、水が氷になるやうにいつの間にもやら揺れ停つて質の変つてゐる自分であつた。(傍線引用者、四九三頁)

また、矢代は母が送つてくれた金を帰国する前に受け取らずに帰つてしまつたことに気づき、次のように考える。

その金が日本へ戻つて来ることは確かだつたが、異国で使ふ金額と日本で使ふ同額とは、為替関係の意味ではなく、まつたく別のものだつた。／＼金にしてさうであるなら、まして千鶴子といふ生きた婦人のことである。千鶴子の心や身体に成りはななくとも、千鶴子その

人の価値が變つてゐるある全く不可思議な質の轉換を、矢代とて今はどうしやうもない、(中略)たとへ異国の旅をしたことのないものであらうとも、共通に身に襲ひかかつてやまぬ日常茶飯のことだのに。——(傍線引用者、四九五、六頁)

千鶴子における〈質〉の變換が〈貨幣〉に喩えられてゐるのはいかにも横光らしく興味深い。つまり、一人の人間が「一」の固有の存在としては捉えられておらず、先述した「パリにおける」のように、〈場〉によつてその質が變換可能な〈一単位〉としてとらえられてゐるのである。これは、たとえば「カソリックの千鶴子」という表現からもうかがうことができよう。帰国してこれから日本で会うことになる千鶴子は、矢代にとつて「日本の婦人」としての価値はもはや意味を成さない。その代わり、逆に、ヨーロッパの象徴である「カソリックの」という形容を被せて、それに付随する存在として、矢代は千鶴子のことを捉えていくのである。他に、矢代は千鶴子を、「血液の純潔」という「母体」として象徴化し、「僕の想つてゐる千鶴子は君ぢやないよ、もつと君から抽象した人だ」と胸中で語ることもある。このように、千鶴子の存在はその固有性を以つて語られることはなく、〈場〉によつてその〈質〉が變つていく

相対的な存在として捉えられているのである。人間の〈質〉のみならず、東野と久慈の〈伝統〉に関する論議にもあつたように、「一の質」は〈場〉によつて常に変換可能なものであり、こうした認識を伴中人物たちは、〈空間の移動〉によつて獲得していくのである。

〈空間の移動〉によつてもたらされるいま一つの変換について考えてみることにしよう。それは、「国境」、あるいは、「国境の間の空間」を移動しながら獲得されるものであると考えられる。矢代は帰国の途に、国際列車を利用してシベリアを経由し、満洲へ向かうなかで、次のように考えている。

後一時間で満洲里へ着くとしてもその間はどこの国のものでもない所だつた。一時間といへば五里ほどの間であるが、名もつけやうのない奇妙なその五里の幅の地上は、これまでまだ一度も考へてみたこともない場所だつた。それもそこを遠慮なく走り脱けることの出来る列車といふものも、国際列車なればこそだつた。いつたい、どこの国のものでもない国際列車といふ抽象性を具へた列車が、どこの国でもない場所を走るといふ世にも稀な真空のやうな状態は、恐らく地球上ではこの五里の間以外にはないかもしれない。それは暗

示と啓示に満ちた闇の中の一時間の筈だつた。(四七三頁)

矢代は、ヨーロッパにむけて旅立つたときは日本の船に乗つて行つたのだが、帰国するときは国際列車を利用してゐる。無論、ヨーロッパ旅行中にも「ヨーロッパ国際列車」には乗るが、自分の国に帰る過程での乗車は、外国での旅行中のそれと意味が違うのは言うまでもなからう。「国境を越して日本へ入れば、自分は誠実無二な日本人にならうと矢代は突拍子もなくさう思った。」「自分の国と接した国境ほど、自分を偽れぬものはないと思つた。」など、矢代は自分を昂揚させていく。そして、矢代は胸の奥でそつと「祖国」と呟いてみる。引用からもうかがえるように、国境と国境の間の空間の移動は、矢代にとつて「祖国」という認識を改めさせてくれる、「暗示と啓示に満ちた闇の中の一時間」であつたわけである。

「国境」という概念について、横光は『歐洲紀行』(昭和二年四月、創元社)において、次のように述べている。

私が日本人であるといふこと、これだけは私はどうしても疑へぬ。これだけが私にとつて唯一の真実であるといふことを信じることの難しさ。これがつまり換算率の不思議さを感じることの難しさだ。このあたりで、

祖国といふ言葉を、まだ一度も自分の国の国境さへ見たことのない日本人に聞かしてみたい。四面海をもつて包まれてゐる日本人の欠陥の一つは、確かに祖国といふ言葉の不思議な戦慄を知らぬことだ。(傍点引用者)

八月十二日)

自分が日本人であることを、日本の中で考えるという状況から転じて、他国と実際に接する「国境」を見ながら外から考え直すことを、横光は「換算」という言葉で表現している。「換算」する、というのは言い換えれば、「国境」、即ち、今までとは違う別の単位で「日本」を捉え直すことを意味する。ただし、つづいて「祖国といふ言葉の不思議な戦慄」とあるように、「日本」を相対的に捉えようとする認識は、同時に絶対的な「祖国」という概念が前提とされているのも確かで、この両者が互いに共存し、せめぎあっている状態がうかがわれるのである。

以上見てきたように、〈空間の移動〉によって、「人の質」も、「日本」という概念も、その価値体系は相対的に変化していくことがわかる。〈場〉によって〈質〉が変り、また、はかる〈単位〉によって認識が転換していくのである。特に、国外から国内への移動において、その転換は克明にあらわれている。帰国後、矢代らが探し求める「日本」とい

う概念も、実はこのような体系のなかで語られている点に注意しなければならぬ。

四、帰国後の「日本」

矢代は帰国後、母の郷里である東北の温泉を訪れ、一種の〈みそぎ〉の儀式を挙行する。ヨーロッパから帰国した後、塩野、千鶴子らは原因不明の発熱に見舞われるのだが、病気にかからずにすんだ矢代は、それを自分が東北で身心ともに安定したからだと思う。その後、冬を上越の山小屋で越し、翌年の春には、九州、京都へと旅立つことになる。

しかし、矢代が帰国した当夜訪れたのは、いわゆる日本的な場所ではなく、銀座裏の店なのであった。

日本を出発する前にいつも歩いた自分のコースを、またそのやうに歩いてみたくなつたのだが、歩きながら彼は、これからの来る日も来る日も、かうして自分は同じ所を歩き一生を過すのかもしれないと思つた。今までの旅中はある街に着いても、二たびここを見ることもなく、明日は旅立つて行くのだと思つたのに、今はさうではなく、もうここは旅の納めで明日からここを動かぬのだつた。(傍点引用者、四八六頁)

帰国直後、外国へ旅立つ前に往來していたところを歩く

という行為によって、矢代は旅から「帰った」という実感
を心に刻むのだが、その認識の中にある〈故郷〉という概
念は、「来る日も来る日も」「同じ所を歩」く場所、つまり、
永くどどまる場所としての意味が付与されている。矢代の
このような考えは、「奈良、京都はすでに電池の切れた日本」
であり、「銀座で一番ヨーロッパ的だと信じてゐた物が、東
洋的に見える」、という『歐洲紀行』のなかの一節にも通じ
ている（『歐洲紀行』六月二日）。要するに、矢代は「日本」
という空間を、西洋を取り込んで近代化を進めてきた（『現
在』の時点に立つて考えていることがわかる。無論、その
後、矢代は国内の各地を訪れながら、西洋に代るべき昔か
らの日本固有の原理を求めていくのだが、そこから〈回帰〉
すべきところを探す姿勢はとらない。作中で、「俳句」を語
り、「万葉のやうにおほらかな清浄さ」など、日本古来の伝
統に拠りながら「日本精神」を語っていく東野とは対照的
に、矢代は抽象的な言葉の渦中であって、自分の観念と格
闘していくことになるのである。

矢代らが「日本」をどのように表象していくのかを、こ
こであらためて、幾つかの観念にそって検討してみよう。
まず、ヨーロッパ空間においてもっとも「日本的」な空間
が広がるのは、矢代たちが「俳句」について議論し、句を

詠んでいる空間においてであろう。事実、矢代や東野が開
陳する「日本主義」の思想の内容より、より「日本的なも
の」を表象しているのは、彼らが交わす言語遊戯の場にお
いてである。俳句をめぐる話題は帰国後もつづくが、ヨー
ロッパという場所の異質さも加わって、ひとときわ「日本的」
な空間となるのである。

先行研究において、表現そのものに注目し、『旅愁』のテ
クスト空間を現実から乖離した言語遊戯の「場」として把
握する主張を展開したのは日置俊次である。日置は『旅愁』
に広がる世界を実体ではない虚構の空間として捉え、横光
の表現意識に視座をおいて論じているが、このような遊び
の空間は、フランスの風物や文化を軽やかに受容するまで
の余裕を生む素地、すなわち「虚構空間を模索する入り口」
を構成するもので、矢代のナシヨナリズムとは切れている
と述べている。テクスト空間を一つの虚構として捉えるこ
とに関しては首肯できるが、しかしながら、その空間を語
っていく語り手が透明でない限り、物語内容と切り離して
考えることは難しいのではないだろうか。

たとえば、東野は、パリの伝統を代表しているノートル
ダム寺院に、日本の伝統を代表する「俳句」が似ていると
冗長に語っているが、そもそも前提として、日本人一行が

プロウニユの湖水やノートルダム寺院などに出かけて俳句を詠むこと自体がことさらに「日本的」な空間を作ろうとする行為であると言わなければならない。無論、外国に滞在しながら日本人だけで群れをなして行動し、俳句を詠む行為を批判するつもりは毛頭ない。問題は、むしろ、その描かれ方である。たとえば、フランス人とフランス語で会話をしている久慈については描写がほとんどなされず、日本人一行が俳句を詠む場面の描写は精緻になされていることや、アンリエットと矢代が日本語で交わす内容は会話文になっっている反面、久慈とアンリエットがフランス語で交わす内容は地の文において語り手の要約によって示されている点、他にも、パリへ上陸する前日、千鶴子が船の中で歌った「パリの屋根の下」という歌も意味を成さない発音だけがひらがな表記で記されている点など、登場人物たちが現在使っている言語と異なる言語は、その意味の疎通が遮断されていることが類推できる。これらからも分かるように、語りが偏重している言語表現を念頭に置きながら、「日本」という表象がどのように造られていくのを見ている必要があるわけである。

「第三篇」以降は、特に、矢代の語りを中心に「日本」が表象されていく。日本に幾何学があったかと聞く千鶴子

の兄に、矢代は、日本の古い祠の幣帛が幾何学の原理と同じだと答える。また、数学的に卓越した原理で造型された「竜安寺の石庭」の美をあげ、これを排中律で説明しようとするなど、「日本」の原理を求めて観念的な論議がつづいていく。これらの作業は、矢代ら登場人物たちの会話文の中で出るときもあれば、主に矢代に癒着した地の文の語りでもまとめられている場合も多い。

なかでも、矢代の思考における観念性を克明に表しているのは、「古神道」の概念であろう。矢代は「古神道」を「一切のものの対立といふことを認めない、日本人本来の希ひ」だとし、その原理を「言霊」で説明していく。その一つが「イウエ」の発音を祈りの言葉にする論理であるが、それをギリシアの幾何学に見比べた後、ナチスの旗の逆置は日本の言霊の原型図に似ているという例を持ち出すなど、論理がどんどん偏向していく。このような突飛な論理付けについて、吉本隆明は比較の不毛さを批判し、「横光利一の悲劇も『旅愁』の主人公の表白する滑稽感も存在しえない（日本）」という原理をヨーロッパとその原型としてのギリシヤに對置させようとしたところに発祥した。」と説明している。また、江後寛士は、「西洋に対して日本文化・日本民族の優秀性を説くための根拠は西洋の科学であり、その方法

は西洋から学んだ論理であるということと、そのために伝統文化の理念的なものだけが抽出され、信仰の本体を幾何学で説明するような奇妙な観念論になってしまった」と指摘している。強引な観念的思考に対するこのような批判は、そのまま横光にも向けられ、磯貝英夫は横光を「野狐」に比喩しながら、「横光の抽象好き、観念好き」は、「強引な横光的屈折」を経ていると批判している。それはたしかに田口律男が述べている通り、「いかがわしくもグロテスクな「日本」を露呈させてしまったことにも通じるのだが、作者横光の意図とは別に、実はこうしたモチーフを結果的に裏切っていく志向もまた、このテクストは内在させているのではないだろうか。

「日本」という観念を〈言葉〉によって表すこと、なかでも、抽象度のもっとも高い数学の概念を用いて、矢代らは「日本」という表象をつくりあげていこうとしている。ところが、〈現在〉の時点に立って考えている矢代は、故郷を忘れた心を嘆息はしているものの、美的なイメージを以って回顧的に語ることはない点に注意したい。つまり、元々「日本」というものがあって、そこに「回帰」しようとしているのではなく、「伊勢神宮の鳥居」、「童安寺の庭」や「幣帛」、「言霊」、「古神道」などの内容を注ぎ込んで

「日本」という表象を意図的につくりあげているのである。ヨーロッパにおける日本の婦人、という相対的な位置にある千鶴子に、「カソリックの」という内容を被せていくように、〈空間の移動〉によって相対的に捉えられる「日本」という形式に、あえて絶対的な内容が注ぎ込まれていくわけである。したがってこの場合、「日本」というトポスは、すでに回帰すべき起源として在る場所ではなくなり、起源をつくろうとすればするほど、逆にそこから遠ざかっていってしまう概念であると言わなければならない。

これは、おそらくはこの小説を起動させている機制にもかわつていよう。作中人物それ自体に対する描写は驚く程少なく、何人の心理に関してもその変化は語られていない。国内から国外へ、国外から国内への移動による矢代の心理の変化についての記述はなされているが、それは他の人物との関係やストーリー上の展開にともなうものというより、〈空間の移動〉という軸によって保障されているものである。人が代用可能な〈もの〉として描かれ、物理的な外界からの相対的なパスベクティブで表出されるテクスト空間。このような空間においては、語り手によって表象される観念の絶対性は、結果的にその意味がかえって対象から分離され、相対的に捉えられてしまうことになる

のではなからうか。当初あげた語り手の意図的な操作は、実は必ずしも成功していないのである。語り手によって対象にあらかじめ絶対的な意味が附与されてしまう負の可能性を、〈空間の移動〉という機制は牽制し、解放すべく、働きかけるからである。語り（＝表象していくこと）とは別の次元で、図らずも出来上がっていく物語世界に、ここであらためて注意を喚起しておきたい。日中戦争、太平洋戦争へとつづく戦時中に「古神道」などの観念を取り入れて「日本」を絶対的な世界として構築していこうとした語り手の意図とはうらはらに、相対的ではない「日本」という概念を、この小説の〈形式〉ははからずも暴いて見せているのである。

【注】

- (1) 吉田健一「旅愁に就て」〔批評〕昭和十五年（一〇月）。
- (2) 岩上順一「横光利二」〔昭和十七年九月、三笠書房〕。
- (3) 保昌正夫「横光利二」〔昭和四一年五月、明治書院〕。
- (4) 東郷克美「『旅愁』——漂う心／漂うテクスト」〔国文学〕平成二年（一月）。
- (5) 本文引用は、戦前版を底本とする『定本横光利一全集 第八

卷』（昭和五七年二月、河出書房新社）に拠った。旧字は適宜新字体に改めた。

- (6) 天沢退二郎「帰りもなく終りもない旅——横光利一『旅愁』と昭和十年代——」〔国文学〕昭和五三年（二月）。

- (7) 日置俊次「横光利一『旅愁』論——そのナシヨナリズムと虚構空間——」〔昭和文学研究〕二〇〇〇年（三月）。他に、実際に詠まれた俳句表現や、詩的破格が散文に持ち込まれている事実などを指摘する（横光利一『旅愁』論〔国語と国文学〕一九九二年（二月）など、あくまで〈表現〉に即して『旅愁』を論じている点は示唆的である）。

- (8) 西尾幹二は『旅愁』がフランスを背景にしながらフランス人がほとんど登場していない点、フランス人に会ってフランス人を「外人」と表現する点などを挙げ、『旅愁』を閉鎖的な小説だとし、矢代をはじめ、『旅愁』に登場する日本人たちは、なんら新しい発見をもせず自己幻想に陥っており、したがって、ヨーロッパを体験しているとはいえないとする（『旅愁』再考——一つの読み方——）〔文学界〕一九八三年十月）。

- (9) 吉本隆明「横光利二」〔悲劇の解説〕筑摩書房、一九七九年（二月）。

- (10) 江後寛士「和魂洋才の悲劇——『旅愁』における伝統と近代主

義一」(横山邦治、山根巴編『近代文学の形成と展開』(二九

一九九九年十一月)。

九八年二月、和泉書院)に所収。

(11) 磯貝英夫「所謂観念性について―横光利一をめぐって―」

〔注記〕 本稿は、二〇〇六年三月二五日、「横光利一文学会」第

〔日本文学研究〕昭和二十七年一月)。

五回大会(於・龍谷大学)での研究発表に基づいたもので

(12) 田口律男「いかがわしい『旅愁』の〈日本〉」(『早稲田文学』

ある。